

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

東郷 雄太 (とうごう ゆうた)

【所属】(助成決定時)

神戸大学法学研究科博士課程後期課程

【研究題目】

冷戦終結と中国をめぐる日米外交

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、冷戦終結期からポスト冷戦期までの時期を対象としつつ、冷戦終結という出来事が日本・米国・中国の三国間関係にどのような影響を及ぼしたのか、という問いを解明することである。1980年代は、ソ連のアフガニスタン侵攻によって東側陣営の脅威が再び高まった時期であった。そのような情勢を背景として、東アジアでは米中間の軍事協力や日中間の経済協力が進むなど、西側諸国と中国の関係が緊密化したことで知られる。しかし、1990年代に入ると、ソ連の崩壊により日米中の三国は共通目標を失い、一部では中国がむしろ脅威として認識される動きさえ見られるようになってゆく。

このような1980年代から1990年代にかけての国際関係の変容を踏まえ、その歴史的過程を日本外交の文脈から解明することが本研究の趣旨である。当該時期の対外政策に関しては、史料上の制約から指導者や外交関係者の思想的基盤が認識は十分に明らかになっていない。したがって、こうした史実上の空白を埋め、冷戦終結の過程で日本外交が果たした役割について評価を下すことが本研究の目標となる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究の趣旨は、1978年から1998年までの約20年間を射程とし、日米中関係の変遷を辿ることにある。具体的には、日米両国がそれぞれ有していた中国認識を分析視角としつつ、その変化が実際の行動に及ぼした影響を吟味するのである。また、当該時期における日本の援助政策の意義を再検討し、対中政策をめぐる日本外交の独自性を問う。

そこで申請者はこの時期を3つの局面に分け、研究を進めることにした。すなわち、(1)冷戦構造を前提としつつ、西側諸国が改革開放期の中国を積極的に支援する段階。(2)ゴルバチョフ登場により東西関係が緊張緩和に向かう中で天安門事件が発生し、中国が国際的な孤立に陥る段階。そして、(3)冷戦終結後に中国が核実験や台湾海峡危機など、日米と中国の間で争点別に関係性が複雑化する段階である。これらの歴史的過程の分析は、冷戦構造の有無が日中関係に及ぼした影響を実態に即して解明する上で重要な意味を持つ。

方法論について言及すると、本研究は政治指導者や外交関係者の思想的基盤、情勢認識にも深く踏み込むことで意思決定過程、外交交渉過程を解明する政治外交史研究に位置付けられる。事実関係の叙述や考察にあたっては、マルチ・アーカイヴァル・アプローチと呼ばれる研究手法を採用することで、異なる政治アクターによって記録された文書を多角的に検討する。ここでは、国内の未公開史料として、情報公開精度に基づく開示文書、外交史料館所蔵の戦後外交記録を、また国外の未公開史料として、ナショナル・セキュリティ・アーカイブの公開文書、米国議会図書館所蔵の個人文書、ロナルド・レーガン、ジョージ・H・W ブッシュの各大統領図書館に所蔵される国家安全保障会議関連文書、英国国立公文書館所蔵の機密文書を渉猟した。

なお、本研究助成により受領した資金は、米国議会図書館およびロナルド・レーガン大統領図書館における史料調査の遂行に充てている。

【結論・考察】（４００字程度）

助成期間中に収集した全ての史料分析が完了したとはいええないものの、おおかた事実関係の全体像を掴むことには成功した。現時点での結論は次の３点である。

第一に、1980年代初頭では米国と日本で中国認識が異なっていたが、中曽根政権期に入ると日本も米国と同様に中国の戦略的重要性を認識し始めたようである。第二に、1989年の天安門事件は中国の国際的な孤立を招いたものの、戦略的な利害を共有する日米両国は密接な協力のもとで中国を再び国際社会に復帰させる主要な役割を担った。第三に、冷戦終結前後期の日本外交から浮かび上がるのは援助分野における影響力を安全保障分野での国際貢献にリネージュさせようとする試みであり、円借款再開を梃子に中国のNPT加盟を実現したことはその最たる例であった。これらの発見をまとめると、冷戦の文脈と日中二国間関係の文脈には一定の相互作用が存在したと言えそうである。

以上の成果の一部は、論文を『国際政治』誌に投稿し、2024年8月に掲載決定の通知を受けている。残りの成果についても、学会報告ののち論文を執筆することで昇華したいと考えている。